

「佐渡の地蔵信仰」 —その過程と現状—

93K087 佐藤 隆行

〈目次〉

1. 序論
2. 地域の概況
地理・地形／気候／人口／文化／産業
3. 地蔵の種類と性格
日本の一般的な地蔵信仰／佐渡で見られる地蔵の種類と性格
4. 地蔵信仰の伝播
佐渡で地蔵信仰が根付いた歴史的要因／佐渡で地蔵信仰が根付いた物的要因／説話の影響による伝播の可能性
5. 地蔵講について
佐渡の地蔵講／他地域の地蔵講との違い
6. 結論
7. 引用文献・注
8. 参考文献一覧

1. 序論

我々が佐渡を訪れ島内を散策するとき石仏が非常に多く散在することに気付くであろう。私も大学3年の夏に、調査合宿で佐渡の金井町を訪れたとき、その石仏の多さと、今も地域に根強く残っている地蔵信仰の姿を、そこで行われている講などを通して見ることができた。

しかし佐渡には、本州から離れた島国であるという簡単な理由だけで地蔵のような石仏が多く存在しているわけではない。地蔵が多いということは、それだけ地蔵が多く庶民の信仰の対象として扱われている証拠であると私は考える。なぜなら一般的に日本で見られる、地蔵信仰に関する特徴が佐渡には多く当てはまっているからである。一般的な地蔵信仰については後でその説明を加えたいと思う。ではその例をいくつかあげてみると、まずどの町村においても、その地域の堂や寺や神社など、地域の人々が集まるところには、必ずといっていいほど身代わり地蔵が置いてある。また今では、観光名所としての要素が強くなっているものの、死者が冥土に赴く際に、地獄のエンマによるひどい苦しみから死者を救済するという信仰の場である、賽の河原が島の北端にある。そして毎年8月24日には多くの地域で地蔵講（地蔵祭り）が行なわれ、冥界との境を示す六地蔵も点在する。そして地蔵信仰が現在も島内で続いていることを象徴するものとして、交通事故や海難事故のあった場所に、また事故が起こる前にその防止を祈願するために、その祈願の対象として地蔵が用いられている。このことは大島建彦氏が著書『民間の地蔵信仰』の中で述べている「地蔵の信仰は様々に発展しているが、安全を守ってくれるという信仰が強く、交通事故や海難事故の多いところには現代でも地蔵を立てる機会が多い。」⁽¹⁾という見解に当てはまっているということからも、佐渡では現在も地蔵が庶民の信

仰の対象として用いられていると考えられる要素となっている。

そこで私は、佐渡ではなぜ今も地蔵信仰がすたれることなく残っているのかということを、歴史、地理、物的なことなどの視点から捉え考えてゆきたいと思う。また佐渡に存在する地蔵の種類や、現在も行なわれている地蔵講に焦点を当てて、今と昔の地蔵信仰の形態の変化などについても触れてゆこうと考えている。

特に佐渡の地蔵講と日本の他地域の地蔵講を比較することは、その独自性や共通性の発見につながるであろう。

そしてこれらのことと踏まえて、佐渡では現在も地蔵信仰が根強く残っているということに對しての私なりの結論を導いてみたいと思う。

2. 地域の概況⁽²⁾

(1) 地理・地形

佐渡の面積は854.6km²で、東京23区の1.5倍に相当する。

島としては沖縄本島に次ぐ日本で2番目に大きい島である。

島内には1市9町村^{*1}あり、訪れる人のほとんどがその大きさに驚く。

(2) 気候

佐渡沖を流れる対馬暖流の影響で、冬の温度が本土（越後）よりも1～2度高く、雪もほとんど積らない。夏には逆に本土より1～2度低いので、冬暖かく夏は涼しいと言えそうである。

(3) 人口^{*2}

佐渡の人口は、江戸時代からあまり増減がない。寛保元年（1741）の記録によると93,334人。明治5年（1872）で106,262人。一番人口の多かった時が第2次大戦後の昭和25年（1950）で125,597人。平成2年（1990）では78,062人、平成7年（1995）では78,061人となり、過疎化的現象が見られる。

(4) 歴史

佐渡も日本の他の地方と同じように、島内各地の遺跡から、1万年前の古代から人が住んでいたことが分かっている。

佐渡に本土から人や文化が入ってくるのは、日本が国として出来上がった8世紀頃からである。佐渡はすでに750年頃に国府が置かれ、国司も派遣された。真野町の国分寺、小木町の蓮華峰寺、畠野町の長谷寺などの存在がそのことを物語っている。そのころから伊豆や隠岐とともに、佐渡が遠流の島と定められたのである。

養老6年（722）万葉歌人の穂積朝臣老が佐渡に流されて以来中世までは、流人のほとんどが政争に敗れた人達であった。その数76人と言われ、彼等の都ぶりがいろいろな形をとって佐渡に伝えられたとも言えるであろう。

佐渡が歴史上にクローズアップされるのは、やはり佐渡金山の発見からといつていい。佐渡は古くから金や銀の出る所として知られていたが、徳川家康は佐渡金山の有望性に目を付け、天領として金山開発をすすめた。そして最盛期の17世紀はじめには世界一といつていい産出量を誇った。それまで寒村だった相川は、40,000人もの大きな町に膨れ上り、金の積みだし港としての小木も栄え、そこを窓口に新しい文化も流入した。

幕府の財政を支えてきた金山も、江戸末期にはすっかり衰え、明治になると日本が世界の仲間入りしたのにひきかえ、佐渡は金山とともに時代に取り残されていった。佐渡の玄関口だっ

た小木や赤泊の港も次第にさびれ、代って両津港が発展していった。両津港は、安政5年（1858）の日米通商条約で開港した新潟港に指定されてから、佐渡の表玄関として登場し、いまや両津航路は佐渡へのメインコースとなっている。

（5）文化

一般的に佐渡は、文化に関しては北陸や西日本の影響を強く受けているといわれる。古くから流人（貴族）が京から来たことや、西廻り航路が開かれてから西日本や北陸の文化が直接佐渡に運ばれたことによるものである。そして佐渡の文化の中には、流人たちがもたらした貴族文化（国仲地方）、金山の発展で奉行や役人たちが持ち込んだ武家文化（相川地方）、商人や船乗りたちが運んだ町人文化（小木地方）の3つの形があるという。これらが混然一体となって、佐渡独特の文化をはぐくみ、同じ新潟県でも対岸の越後とはまったく異なる文化土壤の中にあると言えるだろう。「佐渡は日本の縮図」などと言われるのも、気候・風土とともに文化の面でも言えることのようである。

（6）産業^{*3}

佐渡の農業は米作が中心だが、果樹栽培も盛んで、特産のおけさ柿がトップである。これは主に北海道などへ出荷されている。

また古くから牛の放牧も行なわれ、佐渡牛として移出されている。

佐渡は3分の2が山林で、しかも寒暖両系の植物分布がみられるところから、森林資源は豊富である。近年はナラ原木の椎茸栽培が盛んで、年間5億円の生産量は新潟県で一番である。

水産業では大小39の漁港を基地に、漁獲量約20,000トン。ブリ・マグロなど種類も豊富だが、養殖も盛んである。養殖はカキやワカメが代表的だが、加茂湖のカキの水揚げが年間2億3000万円である。真野町には県下唯一の栽培漁業センターがあり、養殖技術が研究されている。

〈表1〉

	両津市	相川町	佐和田町	金井町	新穂村	畠野町	真野町	小木町	羽茂町	赤泊町
1. 人口	19432	11121	10108	7509	4964	5611	6709	4210	4905	3492
男	9122	5169	4765	3489	2372	2602	3147	1982	2379	1710
女	10310	5952	5343	4020	2592	3009	3562	2228	2526	1782
0～14歳	3118	1806	1742	1286	746	778	1046	712	805	580
15～64歳	11718	6535	6240	4562	2902	3275	3979	2524	2847	1953
65歳以上	4596	2780	2114	1659	1316	1558	1684	974	1253	959
2. 産業別										
就業者割合										
総数	11044	6005	5280	4189	2802	3227	3659	2458	2995	2080
第1次産業	28.1%	28.2%	19.5%	31.8%	34.6%	33.6%	28.2%	27.5%	40.0%	37.4%
第2次産業	20.5%	23.0%	20.3%	15.6%	21.6%	27.5%	26.9%	31.7%	30.3%	35.5%
第3次産業	51.4%	48.7%	60.2%	52.5%	43.8%	38.9%	45.0%	40.6%	29.7%	27.0%
3. 農家人口										
総数	8265	4625	3219	4294	3234	3740	4014	2042	3932	2490
専業(戸数)	345	179	188	269	190	156	138	34	129	64
兼業(戸数)										
農業が主	246	87	148	187	185	148	154	83	197	69
兼業が主	1611	1012	525	738	538	688	655	326	543	444

また、農村に工業をと精密機械工場や、縫製工場が島内各地に出来つつあるが、特異な存在として「佐渡みそ」があげられる。年間生産量約16,000トンで、全国生産額の20分の1に当たるという。

工芸的なものには竹細工と窯業がある。とりわけ窯業は「無名異焼」の名で全国に知られ、窯元も10数軒、日用品から芸術品まで数多く作られている。

(注)

- *1 表1参照のこと。
- *2 男女比、年齢別人口等は、表1参照のこと。
- *3 産業別就業者割合は、表1参照のこと。

3. 地蔵の種類と性格

(1) 日本の一般的な地蔵信仰

ここではまず佐渡の地蔵について述べる前に、日本における一般的な地蔵信仰の変遷と性格を説明しておきたいと思う。

地蔵の救済を信じる傾向が強くなったのは、末法思想が盛んになったころからである⁽³⁾。日本では平安時代後期から貴族の間でこの信仰が盛んになったと言われ⁽⁴⁾、弘迦が入滅されたのち、弥勒仏がでてくるまでの間、無仏の世界となる。そこへ僧形が現われて、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）の衆生を教化救済するのが地蔵であるとされた。とくに、死者が冥土に赴いて、地獄のエンマの裁きを受け、ひどい苦しみに遭うことから救ってくれるのだと固く信仰されていた。この信仰がやがて庶民のあいだに流行するようになると、子安地蔵^{*1}、身代わり地蔵^{*2}、將軍（勝軍）地蔵^{*3}、賽の神^{*4}、石神、サエノカワラ^{*5}、延命地蔵^{*6}などに対する信仰が次々に生まれてきた⁽⁵⁾。

中世になると、地蔵はその姿が一定するようになる。その姿とは、右手に錫杖、左手に宝珠をもつ形態である⁽⁶⁾。そして地蔵は、現実界と冥界の間に立って、冥界にゆくものを救済するという性格が強調された弥陀信仰、浄土信仰とも結び付きながら、地蔵信仰は庶民の間に流行してゆくと共に、民間信仰のなかに入ってゆくようになったのである⁽⁷⁾。後に庶民のあらゆる願望が、地蔵に対して掛けられるようになり、近世には延命地蔵の信仰も生まれてくる。そのため、毎月24日に地蔵講を催すのだというところもある。また毎年7月24日に地蔵盆を行なうところも非常に多い。24日の地蔵盆・地蔵祭りというのは、日本の古い月待ちの信仰がもとにになっているためである⁽⁸⁾。まだ暦の発達していない時代に、二十三夜待ちの信仰が生まれた。昔の人々がなぜ23日を選んだのかというと、それは月の満ち欠けを見て、満月を中心として、月の形がちょうど半分になるのが23日であったからと考えられている。また地蔵祭りは23日の夜から24日にかけて行われるのである。地蔵祭りは、近世になってからは特に盛んになり、四つ辻に二十三夜塔を建てるほどであった。また地蔵は境の神として、村境に立てられる機会が多くなった。村境は現実界と冥界の境としても考えられるようになった。村境に六地蔵^{*7}が立てられているのが多いためである。

この境の地蔵は賽の神と同じ様なものであった。そこから、サエノカワラの観念を発達させ、辻の地蔵に石ころを多く積み上げる習俗が生まれたのであろう⁽⁹⁾。また石神も境の神であり、將軍（勝軍）地蔵はシャクジに対する当て字から成立したものであるとも言われている⁽¹⁰⁾。地

歳の信仰は様々に発展しており、現在では事故防止の願を掛け立てることが多いようである。

地蔵信仰は元来中国のものであるが、日本固有の信仰と結び付いて、庶民の民間信仰として発展し、日本の土地にしっかりと根を下ろし、現在もその信仰の力を保っていると考えるのが、一般的な地蔵信仰の捉え方であろう。

佐渡も例外でなく、地蔵信仰は日本の中でもいまだ非常に盛んであり、地蔵の数も非常に多い。次の項目ではそれらの地蔵について述べていこうと思う。

(注)

* 1 子安地蔵

子育て、安産、子授けの祈願の対象とされている地蔵。主な祈願主は若妻。（石川、1995、p.54）

* 2 身代わり地蔵→第3章（2）参照のこと。

* 3 将軍（勝軍）地蔵→第3章（2）、第4章（1）参照のこと。

* 4 賽の神

ここでは「賽」は「境」と同じであり、世の中の境界に人々の救済を目的としてまつられている神のことである。道祖神。

* 5 サイノカワラ（賽の河原）

地蔵は人の生と死に深く関わっており、子供の守護仏である地蔵は、幼くして死んでしまった子供を慈悲深く庇護してくれる信じられている。人は死ぬと冥土に赴く。しかし、子供は冥土の一里塚ともいべき賽の河原にとどまる。その河原は村外れや山中、海辺といった辺境あるいは墓地や地蔵靈場などに付属して設定されている。また賽の河原は、わが国土着の伝統的な他界観、亡児の葬法ならびに賽の神こと道祖神信仰と地蔵信仰との習合によって、中世後期頃に成立を見た冥界の一種であり、幼子がとどまる現世と冥界の間にいる世界なのである。（石川、1995、p.p.15-16）

* 6 延命地蔵

現世利益の代表的な祈願の一端である「延命」「長寿」といった類の願かけの対象となっている地蔵。延命地蔵として独立しているものもあるが、身代わり地蔵がその役割を担うことが多い。

* 7 六地蔵

六地蔵信仰は、6体の地蔵を六道に配し、六道衆生の救済を目的として作られたものである。これは六觀音信仰に似ているが、この六觀音信仰が盛んだった中国での（10C）の教義に、六地蔵についての記述がないことから、六地蔵信仰は、日本独自のもので、天台や真言の僧によって考え出されたものであると思われる。（速水、1975、p.p.63-64）

（2）佐渡で見られる地蔵の種類と性格

佐渡でも江戸時代に地蔵信仰が庶民の間に広まったと言われ、各種の石仏や石塔とともに、道端や辻のあちこちに地蔵が立てられた。8月24日の地蔵盆には前日の夜祭りから土地の人々が集い、日々の安全や子供の健康な成長などを願い、地蔵の真言を唱え、香花をたむけている。

島内各所の地蔵には、普遍的に願主の身代わりになって救済を請け負うとされる、身代わり地蔵の信仰が強く、長谷寺の大地蔵や真野町の梨ノ木地蔵のようによく知られている地蔵には、特に多く奉納されており、身代わり地蔵が何千、何万と置かれている。それらの1つ1つが人々を救った証である。またかつては佐渡の旧道筋の要所要所や、佐渡の靈峰である金北山道には

その遍路をしめす道標地蔵が立っていた。それから後にはそれぞれに造立の意味を持ちながら、救済の得意な分野を少しづつ担う地蔵も現れてきた⁽¹¹⁾。

これらの独立した意味を持つ地蔵も、島内には多く存在するため、それは地図による所在地の明記に簡単な説明を加えるだけのものに留めておきたいと考え、ここでは佐渡でより庶民的で人々と密接な位置付けにある地蔵をとりあげてみたいと思っている。

①身代り地蔵

身代り地蔵は佐渡では最も顕著に普及している種の地蔵である。人々がどのようにこの地蔵を扱うかというと、地蔵に願いを掛ける人の身代わりとするというものである。人々はその土地土地にまつられた本尊に様々な願いを掛けるときにこの地蔵を用いる。この身代わり地蔵はあらかじめ寺で魂を入れてもらったものが用いられ、人々はこれに様々な願を掛ける。また大きさは様々であるが15~20cm位のものが多いようである。この身代り地蔵が多く集まる場所として挙げられるのは、梨の木、長谷寺、大願寺、賽の河原などであろう。この中でも梨の木は多くの身代わり地蔵が集まる靈験あらたかな場所とされており、ここでは今でも8月23~24日の祭りのときには地蔵が売られ、人々がそれを買って願を掛けている姿を目にすることができる。そこで所狭しと並べられた地蔵の中には、その頭や身体の各部が壊れたものも多く見られることがある。その中には壊れ方が不自然なものも多く、そのことについての2つの見解があることも述べておきたいと思う。

その一つは、地元の郷土史家の本間雅彦さんによるもので、身代り地蔵は治してほしい箇所



梨の木地蔵(真野町豊田)



賽の河原(両津市願)

を壊して願を掛けるのが本来のやり方だが、その壊れ方が不自然な地蔵は廃仏棄釈のときに、人間の手によって壊されたという見解である。もう一つは、梨の木地蔵の管理人によるもので、願を掛けるときに身代わり地蔵を壊すことではなく、身体の箇所が欠けている地蔵は、自然に長い時の中で、風雨により壊れたという見解である。たしかに梨の木の身代わり地蔵はその祈願の内容が地蔵の背中の所に書かれており、祭りのときにも地蔵の身を欠いて持ってくる人は見られなかった。しかし風雨で壊れたというには確かに不自然すぎるものも多く、本間さんの廃仏棄釈の考えも否めないような気がする。また梨の木地蔵で背中に祈願の内容が書いてある地蔵は、見た感じ比較的新しそうなものばかりであったので、もしかしたら身代り地蔵への祈願の仕方の歴史的な変遷がそこにあったのかもしれない。

②道標地蔵（道びき地蔵）

佐渡独特の形態をもった地蔵で、道標地蔵のはかに道びき地蔵とも言われている。地蔵の身体から突き出した腕と指が特徴的で、それが遍路の道筋を表わしているのである。また片側のみ突き出しているものは、佐渡の靈峰である金北山の山道を表わしているものだと言われている。この地蔵は、度重なる石仏盜難により佐渡には皆無に等しいと言う人もいる^{*8}。しかし私の調査ではいくつかその姿を見ることが出きた。

③將軍（勝軍）地蔵

この地蔵についている勝軍とは、本来石神に対する宛字から成立したものである。また佐渡各地の地蔵の中には、その縁起が將軍地蔵と関わりあると言われているものが多い。この地蔵は佐渡では一般的には、江戸時代に大久保長安という人物が、佐渡の靈峰金北山にまつった大きな地蔵のことという。しかし今は、金北山頂には置かれておらず、佐和田町の金北山神社里社に保管され、8月の祭りのときだけ山頂に持っていくられるようである。そのほかにも二宮山神社（佐和田町）には子安地蔵とされている將軍地蔵があり、これは30年に1度だけ公開されている。また昔佐渡で郡の境を定めたときに、その境に將軍地蔵が置かれていたという話もある

^{*9}。



道標地蔵（真野町豊田）



將軍地蔵

④六地蔵

比較的大きい地蔵で、墓との境を示している。今でも島内各地で目にすことができる。また「六地蔵」と書いた約20の木の札を6枚使用して六地蔵と同じ役割をなしているものもある^{*10}。



六地蔵(畠野町長谷寺)

(注)

* 8 計良勝範さんによる。

* 9 本間雅彦さんによる。

*10 本間雅彦さんによる。

(3) その他の靈験あらたかな地蔵たち

①分布について

佐渡は本州に比べると小さな島国であるが、そこにはある特定のニックネームとも言うべきものを与えられた地蔵が多く点在する。

ここではその地蔵たちについて、地図を用いて説明しておきたいと思う。

4. 地蔵信仰の伝播

(1) 佐渡で地蔵信仰が根付いた歴史的要因

① 将軍（勝軍）地蔵の影響による伝播の可能性について

佐渡で地蔵信仰が広まった要因のひとつに、将軍（勝軍）地蔵による影響がある。また「佐渡の靈峰である金北山の本尊が徳川初期に将軍（勝軍）地蔵となったことが、地蔵信仰の広まった一番の理由である」⁽¹²⁾とする記述もみられる。このことを裏付ける代表的な例として、金井町千種にある正覚坊の横向き地蔵の話が挙げられる。正覚坊は薬師十二坊の一つで、古くからの寺である。この寺には横向き地蔵という風変わりな地蔵がある。昔は寺に地蔵堂があり、その地蔵堂は西向きに建ち、地蔵も西を向いていた。江戸時代には、大久保長安が金北山に将軍地蔵をまつることになり、この地蔵があらたかな地蔵として信仰を集めることになった。そこで、正覚坊の地蔵を信仰する人々の中で将軍地蔵を信仰するものたちがあらわれることになる

のだが、なにせ地蔵堂を北（金北山）の方へ向けることはできなかったため、考えた挙句、石工に注文して身体は西を向き、顔だけ北を向く地蔵を作ってもらった。それからは、この地蔵は金北山の將軍地蔵に対する信仰をつなぐものになっていったのである⁽¹³⁾。その他に將軍地蔵は前章でも述べたように、佐渡における郡の境に置かれていたという話もある。これらのことから將軍地蔵が佐渡では比較的強い信仰の要素をもっていたことが分かる。次項からは、この將軍地蔵をまつたとされる大久保長安や歴代佐渡を支配した歴史的人物（雜太本間氏、上杉氏）たちが、なぜ地蔵を多用したのかということを、その人物の信仰など精神的なことも含め、探ってゆきたいと思う。また將軍地蔵とはどのようなものなのかということについても説明を加えておきたい。

②將軍（勝軍）地蔵について⁽¹⁴⁾

勝軍地蔵の成立は、中世の武士の浄土信仰を土台とした、足利尊氏の地蔵信仰がもとになっている。中世になり浄土信仰が武士の間にも広まると、地蔵が戦場に現れて危機を救ってくれるという信仰がもてはやされた。尊氏が勝軍地蔵の像を描く以前は、矢取り地蔵という地蔵があったそうで、その説話が『今昔物語集』の中にある。その説話は以下のとおりである。平諸道という武士が戦場で矢が尽きてもはやと覚悟したとき、心に氏寺の地蔵を念ずると、小さな僧が現れて、矢を拾って渡してくれたので、諸道は危機を脱した。小さな僧は矢に当たって消えてしまったが、戦が終わって諸道が氏寺に詣ってみると、地蔵の背に矢が立っていたという。このような説話があるほど平安時代以来、東国での地蔵信仰は、造像の流行もあいまって盛んであった。また東国の北条氏を中心とした有力武士階級の間では、現当二世の利益が重んじられていた。こうした東国大武士団の出身で室町幕府を開いた足利尊氏が地蔵を深く信仰したものも当然であり、有名な事実である。そして尊氏もまた、諸道と同じ様な体験をしたという説話が義堂周信の『空華日用工夫集』に収められている。内容は前のものとほぼ同じもので、戦場での危機を地蔵が救ってくれたというものである。この体験を期に尊氏は、貞和4年（1348）に母である上杉氏の七周忌に種々の作善をし、みずから將軍地蔵を作った。また暦応2年（1339）に創建した等持院には、「われ三尺の剣をさげて、天下を馬上に定む。殺すところ多しといえども十万に過ぎず」と称して、地蔵10万体を安置した。またこの勝軍地蔵信仰は、これを期に勝軍地蔵は、戦場の危急を救うとともに、殺生を常とし地獄に落ちるべき悪人をも友とするというその独特のご利益が受け、武将たちの間へと広まっていったのである。

③本間氏

本間氏は、佐渡において地頭職を務めた氏族であり、彼等の中でも雜太本間の城主であった本間信濃守は、地蔵信仰の強い支持者であったようである。本間氏は強い浄土信仰の持ち主であったと考えられているのと同時に、境のしるしとして地蔵を多用していたと言われている。彼等が境のしるしとして用いたものは、勝軍地蔵であり、明暦元（1655）年に佐渡奉行が制定した郡境に関連して配置されていたという⁽¹⁵⁾。本間氏が勝軍地蔵を用いた理由は、雜太郡に愛宕山という地名が点在することからうかがえるであろう。愛宕山は勝軍地蔵の縁起と関わりがあると言われている。京都の愛宕山に由来しているものであろう。また配置場所は後章の伝播過程のまとめに表す地図で確認していただきたいが、その地名を挙げておくと、それらは、二見、大須、後尾、月布施、東境山、城ヶ平などであり、この中でも城ヶ平の勝軍地蔵などは金北山のほうを向いていた⁽¹⁶⁾ということから、このころすでに佐渡では金北山が靈峰として注目を浴びていたことがうかがえる。本間氏はこのように浄土信仰の強さを、地蔵という形あるも

のとして佐渡に定着させたという功績を残している。本間氏は後に戦国時代に入ると、佐渡への上杉氏の侵攻により、滅ぼされてしまった。しかし上杉氏がおこなったのは、本間氏の建立した堂に基づく別当の整備のみであって、地蔵はともかく、金北山崇拝の祖形を崩すことはなく、佐渡における庶民の間での、各地の本尊となるべき地蔵を通しての、金北山崇拝という信仰形態には変化がなかったと推測される。

④大久保長安

大久保長安は佐渡での地蔵信仰の広まりに、歴史的に最も関係の深い人物と言えるだろう。また佐渡では一般的に、地蔵信仰は彼が金北山山頂に置いた勝軍地蔵が元になっていると考えられている。彼は甲州武田の家臣で猿楽師の大藏大夫の子で、名を藤十郎といった。彼には新之丞という機智に富んだ兄がいたが、不幸にして長篠の戦で戦死し、からくも死を免れた彼は武田氏の没滅後の日々をしばらく浪々と送っていた。その逆境にあった彼を拾い上げて、金山奉行に登用したのが徳川家康であった⁽¹⁷⁾。慶長8（1603）年、前佐渡金山奉行代官であった田中清六正長が、金山の乱掘の責任を問われ、代官の座を追われると、家康はすぐさま石見銀山（島根）の経営に成功した長安を、佐渡銀山と佐渡一国支配の代官に任命した。前の清六は確かに金を増産させてはいたが、大きな矛盾も抱えていた。それは全力をあげて金を掘る一方で、坑道の崩壊を防ぐ工事や、湧き水に対する排水工事が、必要は感じられていても実践してこなかったからである。このような状態のなかで続く乱掘は、たちまち坑道の崩壊や水没を招いた。いかに高品位の鉱脈が続いているても、このようなその場限りの鉱山稼ぎでは鉱脈はだめになってしまう。これらの現状を改善するために長安が起用されたのである⁽¹⁸⁾。長安が最初にやらなければならなかったことは以下のことであった。（1）排水溝の制作（2）鉱山人口の増加による不足物資を他国からの供給による物価の安定。そして長安は、慶長8年にまず代官所を、相川湾を見下ろせる台地に移すことを指示し、翌年この佐州御役所が完成するのを待つて渡海し、銀山の現状を詳しく検分すると同時に、自ら佐州御役所を中心とした具体的な町割（都市計画）の指揮をとった⁽¹⁹⁾。相川の町が大きな城下町的な展開を見せ、奉行支配も軌道に乗り、治安が安定したのは慶長8年の長安就任のことと言われている。そしてこのように人間的に信頼があり、大きな功績をもった長安が、慶長14（1609）年に、以前本間信濃守が金北山に建立した堂を再建し、そこに勝軍地蔵を置いた⁽²⁰⁾ということが、庶民の大きな注目を集めることになり、さらに地蔵信仰が広まったのは当然のことと考えられるであろう。

⑤將軍（勝軍）地蔵による伝播過程のまとめ

將軍地蔵が地蔵信仰の伝播の一要因と考えた場合、佐渡では以下のような地蔵信仰伝播の歴史的過程が推測される。ここではその過程を4段階に区切ってまとめてみようと思う。

〈I（～17世紀）〉

地頭として佐渡に入った本間氏が、その強い浄土信仰のために、佐渡各地に境のしるしとして勝軍地蔵を用いる。またその中に金北山を信仰していた形跡もある。この時代は本間氏が浄土信仰を、地蔵という形のあるものとして佐渡に定着させた時代である。

〈II（17～18世紀）〉

明暦元年（1655）に佐渡奉行が、以前置かれた勝軍地蔵に関連して郡境を制定した。そして佐渡で大きな功績をあげ、島民の信頼を得た大久保長安が靈峰金北山に將軍地蔵を建立（本間氏のものを修造建立）したことにより、佐渡各地の寺の地蔵が、この地蔵をより靈験あらかなものとして崇拝するようになった。また本間雅彦さんは、元来あった將軍地蔵も、金北山の

佐渡全島現状図 付、鉱山分布

鉱山名(廃坑を含む)
西三川金山は便宜上
字名「金山」による



ものを挙げようになったと言っている。この時代は各地の寺の地蔵が金北山への方向性をもった時代と言えよう。

〈III（18～20世紀初ごろ）〉

前の時代に続き、比較的身近な、各土地土地にまつられた金北山の靈験を継ぐ地蔵尊に、多くの庶民が身代わり地蔵をあげ願を懸けるようになる。→身代わり地蔵の氾濫期の到来。

〈IV（戦後～現在）〉

各地の地蔵尊が金北山とのつながりを持っていたことはほとんど忘れられた。なぜなら佐渡各地で人々に將軍地蔵についての問い合わせをしたところ、知っている人が皆無に等しかったからである。そして現在は地蔵信仰は金北山の信仰とは分断され、地域レベルのものとして存在している。地蔵は地域の人々に囲まれ、特に高齢者に講などを通して、集いや語らいの楽しみを提供するために機能している。

以上の4つの段階を経て、佐渡には地蔵信仰が今も定着していると私は推論する。

（2）佐渡で地蔵信仰が根付いた物的要因

佐渡で地蔵信仰が根付いた物的な要因として挙げられるのは、石仏を作るための材料としての石材が豊富であったことである。佐渡は石切りの顯著な島であり、石仏を作る材料となる「ゴマ石」と呼ばれる鉱石が非常に多く産出するのである^⑪。とくに小泊（羽茂町）、椿尾、西三川（真野町）は江戸時代には石切山として栄え、「北陸、奥州至らざる所なし」という言葉があったほどであった。また島内にある石仏の作者の多くは、椿尾、小泊の石工たちであった。中世に小泊が石細工生産の町になったのが最初で、板碑、五輪塔、道祖神、四十九院石仏など、江戸初期までの石造物の多くは小泊石工によるものである。小比叡山蓮華峰寺と相川の大安寺境内の五輪塔には、小泊の石工惣左衛門の名が刻まれている^⑫。また化政期（1804～1830）いでた椿尾の五兵衛などは石工の名人と言われ、その作品は越中、能登にまで及んだという。佐渡での彼の作品は、椿尾の六地蔵、宿根木（小木町）の称光寺にある聖観音像などがある^⑬。また椿尾では現在も石工の岡崎利右衛門さんがおられ、島内のものだけでなく、他県からの依頼の品である地蔵たちを作るために石切場へと足を運び、仕事に精を出している。岡崎の苗字は三河国岡崎に由来し、江戸時代にこの村の名主であった岡崎権三郎によるものであろう。このような姿が今だに佐渡で見られることは、佐渡の人々が今だに地蔵と日常の間に深い関わりを抱いていることの表われととらえてよいのではないだろうか。

（注）

*11 計良勝範さんによる。

（3）説話の影響による伝播の可能性～山椒太夫伝説

佐渡では説話の影響によって、地蔵信仰がひろまったという可能性も考えることができると思う。ここで地蔵信仰の伝播に影響したと考えられる説話とは、安寿と厨子王がその登場人物として知られている『山椒太夫』伝説である。この説話の中には、その一節に、地蔵の靈験が関与している次のようなシーンがある。これは北片辺の南方の村である達者での言い伝えであるが、この村には「オイザカ」という坂がある。これは厨子王丸と安寿姫が、眼の見えない母を負ってさがった坂といわれている。そして達者の地蔵さんの前で眼を洗うと眼が開いたという話も残っている^⑭。この地蔵はそれからは「目洗い地蔵」と呼ばれ、現在でも信仰を集めて

おり、「め」という字を自分の年の数だけ紙に書いて、この地蔵に貼っておくと目がなおると信じられている⁽²⁴⁾。このように現在佐渡において代表的というべき地蔵の起源が説話によるものもあるという事実は、せまい範囲ではあるが、地域的なレベルでの地蔵信仰の伝播に関与していることを裏付けているものではないだろうか。

5. 地蔵講について

(1) 佐渡の地蔵講

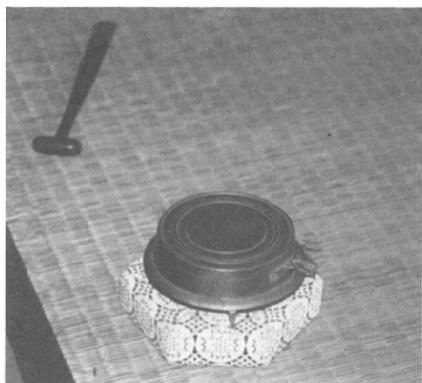
地蔵信仰の強い佐渡では現在も地域レベルで、地域に伝わる地蔵を囲んでの講や祭りが行われている所が多い。また地蔵講は毎年8月24日に地域の老人の楽しみとして行われている所が多いようにも思えた。

私が散策して地域の人の話を聞いた地域では、新穂村、金井町、両津市、真野町で講が行われており^{*12}、いづれも老人が中心となっている。佐渡の講の形態は、その日付や構成などが似ているため、その代表として金井町中興藤津集落のものを紹介していきたい。

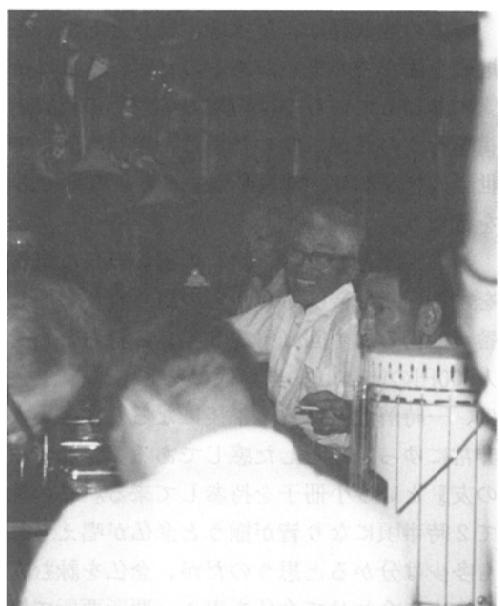
藤津の地蔵講は、夏は地蔵祭りとして、毎年8月24日に行われている。春（1月）にも堂で地蔵を囲んでの集いがあるのだが、それは祈禱が中心のもので、夏のものとは趣向が異なる。講に参加しているのは地域の各家^{*13}の代表者21名である。この人達が集落にある堂^{*14}に集い、講を行うのだが、堂の管理は毎年持ち回りで行われている。この管理に携わる人には、堂番と世話人^{*15}があり、堂番が講をまとめる役であり、世話人は堂番の補佐（会計、賄いの調達など）を行なう。

講の手順としては、24日の講の当日に堂番が指揮をとり、朝5時頃から堂とその周りの掃除をする。その後はこれから打ち合わせをして、何時に集まるかを決定する。この場も当然堂番が仕切る。今回（平成8年）の打ち合わせ内容は、講は午後2時より開始ということと、一人500円の賄い（弁当）代、そして米1合を持参するというものであった。この打ち合わせ後は、一時解散となる。午後になると、早い人でも決められた時間よりもやや遅れて堂に来る。非常にゆっくりとした感じである。参加者は念仏を唱えるときに使う鐘（チン鐘）と『お念仏の友』という小冊子を持参して来る。この鐘は各家に代々受け継がれているものという。そして2時半頃になり皆が揃うと念仏が唱えられ始める。この時の様子は下の写真を見てもらっても多少は分かると思うのだが、念仏を詠む人が1人、太鼓を叩く人が2人、その他の人には前述の3人に合わせて念仏を唱え、要所要所で鐘をならすといったものである。しかし、中には念仏は適当に済ませ、本当の楽しみはその後の皆との語りの時間であるという気持ちを露骨に表している人もいた。（その人は「表向きは地蔵講という形でも、皆考えていることは同じ、この後の飲み食いが目的で、それが楽しみで来ている。」と言っていた。）そして念仏が終わると、各自持参した米でおにぎりが作られ、賄いも届き、それらを囲んでの語りの時間となるのである。

この講では、地域の人がいかに皆と集まることを楽しみにしているかということがひしひしと伝わってきたように感じる。そして、この集落の地蔵は、信仰云々というよりも、地域の人々の団結力をより強いものにするための媒体として機能しているようにも感じられた。



鐘と小冊子



地蔵講とその後の集い

(注)

- *12 いづれも地域レベル（集落レベル）のもので、町単位のものではない。
- *13 集落には24軒あるがこの日は21軒が参加していた。
- *14 堂は川のそばにあり、そこにまつられる本尊（地蔵）はその川（藤津川）から流れて来た火伏せの神であるという言い伝えがある。ただし現在まつられている地蔵は、その本尊が盜難された後のものであるという。
- *15 堂番1人、世話人1人で構成される。

(2) 他地域の地蔵講との違い

佐渡の地蔵講（地蔵祭り）というものをより深く見つめるために、ここでは、日本の他地域のものと比較を行ない、佐渡のものと他地域のものの相違点、また共通点を浮き彫りにしていこうと思う。

また比較対象として北は青森県のものを、南は熊本県の事例を用いたいと思う。

①青森県恐山の地蔵講⁽²⁵⁾

青森県下北郡には、全村の集落ごとに地蔵信仰が存在する。この民間信仰は老婆たちによって支えられ、継続されてきた地蔵講である。この講中の成員は婆様たちであり、婆様たちが信仰の担い手である以上、別名を「パパ講」という。この地蔵講は毎月24日がご命日であることから、「ニジュウヨッカ」とか「シンジョサマ（地蔵様）の日」とも言われる。また「オゴウ（お講）」という地域もある。当日は村休みとし、山仕事などは一切休業となる。この日に働くものがあれば罰金が徴収される。それだけ厳格に執行されてきた民間信仰である。したがってその命日には、集落の各家から必ず1人が地蔵講にお参りするよう参加が義務付けられている。

またこの講には和尚が関与することがほとんどない。婆頭を中心とした信仰集団であり、集落の婆様たちが講中になり組織されたものである。講の要素はそれぞれの集落によって異なるが、中にはダンゴを交換するという特異な習俗を伴うものもある。ダンゴの交換とは、各自がダンゴを作つてもって行き、堂で集落中の人とダンゴを交換するというものである。ダンゴ作りに使用する米は、一軒につき3升から3升5合であるという。なぜこのように多くの米を使うのかというと、地蔵にお供えしたダンゴを持ち帰り家族全員で食べるということもあるが、小さいダンゴは地蔵に対する気持ちが弱いと考えられているということが一番の理由のようである。

②熊本県熊本市の地蔵講⁽²⁶⁾

熊本県でも多くの地蔵講ならびに地蔵祭りがいまだに行なわれている。その中で熊本市沖新町甲北集落で行なわれている地蔵講、祭りを取り上げてみたい。

この集落の地蔵堂は、間口2間、奥行き2間の木造瓦葺で半間の内陣が設けられ、台石を堂の高さまで積み、その上に地蔵を安置している。祭りは1月24日と8月24日の2回で、講の担い手である六隣保組（近隣6集落の集合）と呼ばれる組の座元ごとに、座祭りというものが行なわれる。参加戸数は約150戸と大規模である。祭りの日は僧侶を呼び、地蔵堂で経をあげてもらい、ここに出席するのは座元のみである。地蔵堂での三部経が終わると僧侶は請け負いの組座元へ招待され、ご馳走を受けるわけであるが、この僧侶接待の請け負いは6組の輪番制をとっている。こうしてそれぞれ6組の座元での共同飲食が行なわれ、地蔵祭りは終了する。

またこの集落では行なわれていないようであるが、熊本では子供たちが地蔵堂に集まり、参りに来る人から賽銭をもらうという習俗が非常に多く見られるそうである。

③佐渡と他地域の地蔵講・地蔵祭りの共通点と相違点

最後にこの章のまとめとして、佐渡と他地域の地蔵講・地蔵祭りについての共通点と相違点を考えてみたいと思う。比較は、1. 日時、2. 主催者・管理者、3. 参加者年齢、4. 特異習俗の4点にポイントを置いて行なってみたい。

〈表2〉

	佐渡	青森	熊本
1. 日時	8月24日が多い	毎月24日 隔月24日 1.5.6.12月24日 の3タイプ	7月24日が多い
2. 主催者	堂番	婆	隣保組の座元
3. 年齢層	規定なし、1家1名	60歳以上の女	子供から老人まで
4. 特異点	特になし	ダンゴ交換	子供の参加

〈表2〉をもとに考えると、まず日時だが、これは第3章の一般的な地蔵信仰の項で述べたように、北も南も24日に集中しているので、これといって特異な点は見られない。主催者に関して特徴的なのは（これは佐渡と比べてなので佐渡の視点から見ると）佐渡が男女関係なく持ち回りなのにに対し、北は女性しかも60歳以上の人であり、南は座元という集落合同体の代表者という違いが見られる。ここでは北の方にその規定の細かさ、厳しさが見られる。

年齢層に関しても北の方がその区切りがはっきりしている。

最後に特異点に関してだが、北はダンゴの大きさで地蔵への気持ちを表しており、これは地蔵への思い入れが非常に強いことを示しているように思われる。また、家に持ち帰り皆に分け与えるということも、佐渡に比べ、地蔵に対する信仰の強さを表すものであろう。逆に南の方では、子供も参加するということから、佐渡では過疎化が進んでいるということもあるが、佐渡以北のものよりも、年齢的に参加できる範囲が広いと考えることができるだろう。以上のことから考えると、佐渡の地蔵講、地蔵祭りは、参加年齢層が比較的高齢であり、その規模も小さいが、厳しい規定もなく、比較的参加しやすい老人の憩いの場のような存在であると言えるのではないだろうか。

6. 結論

今まで佐渡の地蔵信仰の過程や特徴を捉え、考へてきたわけであるが、最後になぜ佐渡では地蔵信仰が人々に幅広く受け入れられ、それがすたれることなく残っているのかということについて、私の見解も交えて述べてみたいと思う。佐渡の各地でその土地の人に聞いた話をもとに考えてみるとしよう。

まずなぜ地蔵が多いのかということについての見解だが、金井町の講に参加していた小田貞司さんは、「地蔵の増えた理由は、佐渡の人が自分の願いを地蔵に託してまつる気持ちがとても強いので、すぐ何かあると石工さんに頼んで地蔵を作ってもらう。なぜいろいろな所に地蔵をまつるのか」というと、それはいろいろな所に地蔵を置くと、みんなが拝んでくれるということを、昔から土地の人々はよく知っているので各地に地蔵を置いた。そして、ここには何かがあったのだよということを常に心に留めておいて欲しいという願いが強いということもそうである」と話してくれた。

また地蔵信仰の象徴である地蔵講がいつまでもすたれないということに関しては、新穂村の根本寺向かいの土産店の60歳の女性が、次のように述べていた。「佐渡の地蔵信仰がすたれな

いのは、一家から1人、講に参加する形態が多く、歳をとったら行かなければならぬと考えているから。小さいときは、それほど気にするものではないが、集落に対する義務感が強いので、参加しなくて罰とかはないけれど、一家の長になると参加せざるを得ないものと考えているからではないか。」このように地元の人の話を聞いた限りでは、地蔵信仰は集落レベルで行われるものであるという認識が強いようと思われる。

第4章で述べたような地蔵信仰の歴史的な変遷がそこにあったとしても、今の佐渡では金北山や將軍地蔵を意識した地蔵信仰の形態は残っていないようである。事実、佐渡の各地で將軍地蔵というものは皆無に等しかった。人々にとって、今自分が拝んでいる地蔵の過去などはどうでもよいことなのだろう。今佐渡は過疎化が進み高齢者の島になっている。その高齢者が地蔵というものを通して集い、語り合いの場を求めて地蔵堂に集まる。佐渡の人々の地蔵信仰の特徴は、非常に強い地域レベルのつながりや地域で語らうことの楽しみを、地蔵というものを媒体として、また地蔵堂での集いを通して確認したいという、人々の願いによって支えられているにあると言えるのではないだろうか。これが今回の調査で私が導いた結論です。

最後に、突然の訪問にも関わらず、この調査に快く協力してくださった地元の方々に感謝の気持ちを申し上げたいと思います。ご協力大変ありがとうございました。

7. 引用文献・注

- (1) 大島建彦『民間の地蔵信仰』1992 p.497
- (2) 『佐渡入門』1995 p.11
- (3) 大島建彦 1992 p.497
- (4) 前掲 p.497
- (5) 前掲 p.497
- (6) 前掲 p.p.497-498
- (7) 前掲 p.p.498-499
- (8) 前掲 p.498
- (9) 前掲 p.499
- (10) 前掲 p.499
- (11) 計良勝範『佐渡島』
- (12) (2) に同じ p.19
- (13) 田中圭一『島の神・島の仏』1978
- (14) 速水侑『地蔵信仰』1975
- (15) 『畠野町史 信仰編』1985 p.43
- (16) (15) に同じ
- (17) 長谷川利平次『佐渡金銀山史の研究』1991 p.135
- (18) 『佐渡相川の歴史 資料集7』p.35,47
- (19) 前掲 p.p.287-289
- (20) 『佐和田町史 通史編2』p.662
- (21) 佐藤利夫『にいがた歴史紀行⑦ 両津市・佐渡郡』1995
- (22) (2) に同じ p.19
- (23) 酒向伸行『山椒太夫伝説の研究』1992 p.122
- (24) 前掲 p.122
- (25) 高松敬吉『巫俗と他界観の民俗学的研究』1993 p.p.257-258
- (26) (1) に同じ p.p.517-518

8. 参考文献一覧

- ・大島建彦『民間の地蔵信仰』北辰堂 1992
- ・財団法人佐渡博物館編『佐渡島』新潟交通 1993
- ・佐渡観光協会編『佐渡入門』佐渡観光協会 1995
- ・田中圭一『島の神・島の佛 I・II・III』島の神島の佛刊行委員会 1978
- ・佐藤利夫『にいがた歴史紀行⑯ 両津市・佐渡郡』新潟日報事業社 1995
- ・畠野町史編纂委員会『畠野町史 信仰編』畠野町 1985
- ・地方史研究協議会編『佐渡 島社会の形成と文化』雄山閣出版 1977
- ・山本修之助編『佐渡叢書 第5巻』佐渡叢書刊行会 1974
- ・佐野賢治『星の信仰』北辰堂 1994
- ・田中久夫『地蔵信仰と民俗』岩田書院 1995
- ・速水侑『地蔵信仰』槁新書 1975
- ・石川純一郎『地蔵の世界』時事通信社 1995
- ・楠正弘『下北の宗教』未来社 1968
- ・高松敬吉『巫俗と他界觀の民俗学的研究』法政大学出版局 1993
- ・堀和久『大久保長安 上・下』講談社 1990
- ・桜井徳太郎編『地蔵信仰』雄山閣出版 1983
- ・大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂 1994
- ・昭和出版研究所編『日本百科大事典6』小学館 1963
- ・長谷川利平次『佐渡金銀山史の研究』近藤出版社 1991
- ・酒向伸行『山椒太夫伝説の研究』名著出版 1992
- ・『相川町史』・『佐渡国誌』
- ・『佐渡 自然・社会・文化』・『佐渡相川の歴史 資料集7』
- ・『佐和田町史 通史編2』
- ・『新潟県統計ハンドブック 平成7年版』1995

(卒論指導教員 神田より子)